

ポスター①

患者さんが急変してももう慌てない

祖師谷店
○柴田 聖子
信田 愛

【背景】

祖師谷店がある世田谷区は、男性女性共に平均寿命が「東京都1位」（2015年厚生労働省）である。また、10世帯に1世帯が「高齢者かつ独居の世帯」（2010年厚生労働省）でもある。このような事情もあり、来局される患者さんから、「この前まで入院していたよ」、「救急車で運ばれたよ」、などと話を聞くことも度々であった。

今回患者さんがお薬を受け取った後、薬局内にて意識が不明瞭となり、救急搬送される事態を経験した。到着した救急隊員に無事に引き継ぐことはできたものの、少し慌ててしまう場面もあった。あまり遭遇しない事態であり、「救急隊にはなんと伝えるのがよいのか」、そもそも「どんな場合に救急車を呼ぶのか」について職員間で共有し、突然起こる事態に対応できるよう「救急搬送までの流れを確認」しておく必要があると考えられた。

【方法】

まず、救急隊員から実際に確認された内容を元に「救急隊への伝え方シート」を作成した。シートに沿って患者の情報を埋めていき、救急隊へ読み上げる形式とすることで、なるべく簡便な作業となるよう心掛けた。尚、併用薬、アレルギー情報、意識レベルの伝え方なども盛り込んでいる。

次に祖師谷店の職員全員で「仮の事例を用いた訓練会」を行った。この中で消防庁が作成したビデオを視聴し、どんな場合に救急車を呼ぶかの指針となる「緊急度判定プロトコル」についても理解を深めた。また、事例のロールプレイを行い、伝え方シートへ記入して、実際の手順を確認した。

最後にアンケートを実施することで、今回の対策自体についての振り返りも行った。

【結果と考察】

アンケートから、伝え方シートを作成し、訓練会を行うことで、救急車についての理解が深まり、忙しい中でも適切に対応できそうである等、意見が得られた。

独居の人が意識不明の状態でも搬送され、かつ家族がすぐに判明しなかった場合、薬局で聞き取った「アレルギー情報」、「併用薬情報」等が救急現場での情報源となる可能性もある。このことは心得た方がよいのではと思われた。